

序　　文

小樽經濟専門學校は昨年五月を以て正に三十五年の星霜を閲し、昨秋吉日を卜して其の祝賀の式を舉行したのである。

顧みれば、本校が明治四十四年に當時僻遠の地とされた北海道に本邦第五の高等商業學校として呱呱の聲を擧げたのは、産業立國の時代的要望と相俟つて、北方文化開發の國家的人材を養成せんが爲めに外ならなかつたのである。

爾來、幸にして校運隆盛を極め、内に熱誠眞摯なる教授陣容を擁し、常に純良潑刺たる學生を迎へ、外には六千に垂んとする卒業生を世に送り、いさゝかわが國民經濟の發展に貢獻し來れることは欣快に堪へないところである。

今や、日本は冷嚴なる敗戰の結果、國土並に産業の上に根本的變革を蒙り、この荒廢の中よりわが國經濟の再建を圖るが爲めには、地積比較的大にして豊富なる資源を藏する北海道の開拓に俟つより外に道はない。従つて、こゝに所在するわが小樽經濟専門學校の責務は實に重且大なりと言はねばならないのである。

この重大なる使命を達成するが爲めには、固より學園内部のわれわれとしては内容充實に全力を傾注しその質的向上に渾身の努力を拂はなければならぬのであるが、學園の内容充實、質的向上は専ら燃ゆるが如き熾烈なる攻學心の振起によつて齎らされるのである。わが敬愛する同僚諸君が茲に平素研究せる成果の一端を刊行して創立三十五周年を記念せんとする所以のものは實に此の趣旨に基づくものである。

憾らくは、資材不足の折柄、諸教授研鑽の結晶たる諸論稿を同時にこの一卷に收むることを得ず次冊に亘つて分割輯録せざるを得なかつたこと、頁數に制限せられて論題を詳論するに充分なる紙面を用ひることが出来なかつたことである。

冀くば、更に數年の後には全員一層の進境を現出し以て大冊の「小樽商科大学記念論文集」の刊行せられんことを今から翹望して止まない。

昭和二十二年六月

小樽經濟專門學校長

大野純

一